古長　瑶子（千葉）

沐浴（2009 年）F50

夏が還る刻（2024 年）F60

絵をかくことは生きること。生きていることを実感すること。私自身と真摯に向き合うことです。

私が今、心動かされているのはこれですと、線・形・色・構成そしてハーモニーを精根こめて作りあげての結果が絵画です。従って、制作には「何を表現したいのか」が、はっきりしていなければ何も始まりません。そしてこのように進めていこうというイメージがなければなりません。

37 才で蒼騎会員としてスタートした私の題材は「生命への讃歌」でした。人も、花も、動物も、木々もうつろいやすい限りある生命だからこそ、その時でしかない輝きを、感動を表現したいとの思いで描きました。そのうちに限りある生命の人間が永劫への扉を開けようと世界各地に創造的な遺産をのこしている。その圧倒的な存在感からイメージをひろげて表現したくなりました。中国やシルクロードの仏教的遺産、ロマンに溢れた飛天、ギリシャ・ローマの古典的遺産、それらから「永劫へのいざないシリーズ」として 50 代から 60 代へ 10 数年とりくみました。そしてもう一度、人間に焦点をあててみたくなり、インドへ取材の旅を重ね、人物デッサンの基本を下地に、生活している人間をテーマとしてとり組みました。

77 才の肺癌の手術後、東京から千葉へ移住して、今は外房の自然に自分を解放して、感謝の気持で制作中。

第 15 回蒼騎展（1975 年）会員推挙
審査委員　文部科学大臣賞